季刊 @h ［アット・エイチ］

vol. 61
SPRING 2019

特集

こどもの時間。

〈連載〉
中川大介／西野鷹志
庄司 証／長谷山裕一
米田哲平／夏井俊介
國立大貴

TAKE FREE

@h 61 季刊［アット・エイチ］
2019年春号（総61号） 2019年3月31日発行（季刊）
発行人・池田 誠 編集人・中村ひでのり
（一財）北海道国際交流センター（HIF）
〒040-0054 函館市元町14-1 TEL 0138-224770 FAX 0138-224660
E-mail volut@hif.or.jp http://www.hif.or.jp/volut/

Hotel & Spa Resort LA VISTA 函館ベイ

海鮮中華のおすすめランチ

LUNCH MENU

ラビスタ函館ベイ10周年記念
特選ランチコース

•冷菜3種盛り合わせ
•道央伊達産めぐみ鶏のから揚げ
•道産牛肉とピーマンの細切り炒め
•海老チリソース
•道南上ノ国産フルーツポーク入りカレー風味 麻婆豆腐
•蒸し餃子2種
•蟹あんかけ炒飯
•本日のおすすめスープ
•本日のおすすめデザート
•コーヒー

〔おひとり様〕3,300円（税抜3,056円）

飲茶ランチセット

•おすすめ飲茶5種
•海老チリソース
•水餃子入りスープ
•野菜サラダ
•デザート
•コーヒー・茶

〔おひとり様〕2,300円（税抜2,130円）

七飯産 牛ロースステーキ炒飯
2,700円（税抜2,500円）（スープ・デザート・コーヒー付）

ふかひれあんかけラーメン
各2,000円（税抜1,852円）（デザート・コーヒー付）
•ふかひれあんかけチャーハン
•ふかひれあんかけ焼そば

海鮮あんかけ焼そば
各1,500円（税抜1,389円）（スープ・デザート・コーヒー付）
•海鮮あんかけチャーハン

五目チャーハン
1,500円（税抜1,389円）（スープ・デザート・コーヒー付）

サンラータンメン
酸辣湯麺
1,500円（税抜1,389円）（デザート・コーヒー付）

カニあんかけチャーハン
1,500円（税抜1,389円）（スープ・デザート・コーヒー付）

海老チリあんかけチャーハン
1,500円（税抜1,389円）（スープ・デザート・コーヒー付）

海鮮中華料理 海風楼
ラビスタ函館ベイ1F
予約・お問い合わせ TEL 0138-23-6225 <内線番号56>
ランチ 11:30～14:30（L.O.14:00）
ディナー 17:30～21:30（L.O20:30、コースメニューのみ20:00）
季節によって営業時間が変更になる場合がございます。

ビュッフェスタイルのランチもおすすめです！
90分制 1,800円～（税抜1,667円）
Casa de Norte 北海シーフードと牛肉ステーキ レストラン ノルテ
ラビスタ函館ベイ1F
予約・お問い合わせ TEL 0138-23-6377 <内線番号57>
ランチ 11:30～14:30（L.O.14:00）
ディナー 17:30～21:30（L.O.20:30、コースメニューのみ20:00）
季節によって営業時間が変更になる場合がございます。

Hotel & Spa Resort LA VISTA 函館ベイ
〒040-0065 北海道函館市豊川町12-6 TEL：0138-23-6111 / FAX：0138-23-6222
https://www.hotespa.net/hotels/lahakodate/

C O N T E N T S

季刊［アット・エイチ］
@h vol. 61 SPRING 2019

特集 こどもの時間。 p4

子どもたちに自由な時間を p5
タチヤーナ・イリイナ

「多様性」を体験する場こそ p6
フレッド・ガーソン

思い切り、生き生き過ごせるよう p7
横山南海子

子どもはいつもウェルカム p8
田中樹里

迷惑をかけあって仲良くなれる p9
馬麗

支えあいながら子育て p10
趙 喜蓮

地域で育てる。 p11
北海道東川町「もものがの家」の目指すもの

ゆるやかに見守る目を p12
庄司 証

子どもたちの環境は変わっている p14
本田真大

すべての子どもが健やかに p16
佐藤ひろみ

街に関する一考察 ——— 長谷山裕一 p19

人と水と空と森の話
インカラ／彼方を見る。 ——— 中川大介 p20

昔の子ども、今どきの子ども
かぎっ子 ——— 庄司 証 p23

連載 米田哲平／夏井俊介／國立大喜 p24-25

［ライカはゆく］ ——— 特別寄稿／第13話
ジャズマンの赤レンガ倉庫 p26
西野鷹志／文・写真

HIF インフォメーション INFORMATION p18

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付 p30

FROM EDITOR

小学校４、５年と過ごした上磯町（現北斗市）の沖川小学校。春になると、桜を見に大勢の人が訪れる戸切地（へきりち）陣屋のすぐ下にある学校だ。自分の父親はこの学校の教員で、学校の敷地内に教員住宅があり、１分あれば家に帰ることができた。授業が終わるとランドセルを家において、すぐに仲間たちと野球をした。全校でも100人前後の小さな学校だから、違う学年が混じり合い、時には中学生も一緒にグラウンドを駆け回った。

夕暮れまで遊んで、真っ黒に日焼けして、泥だらけの足で帰る毎日。宿題もやっていたのだろうが、遊んでいた記憶ばかりが鮮明で、勉強していたことが思い出せない。

いつの間にか先輩への接し方、後輩の面倒の見方など、年齢の違う子たちとの対応を学んでいた。地方には、そんなふうに年齢の異なる子どもが集まったり、地域の大人たちと関わったりする機会がまだまだある。昔に戻る必要はないのかもしれないが、今を生きる子どもたちの時間が、もっともっと多様であって欲しいと願っている。

（一財）北海道国際交流センター（HIF）
事務局長　池田　誠

cover photograph/Shinji Komiya　cover design/Nakamura Hidenori
※本誌記事、写真、レイアウトの無断転載を禁じます。

森へ、湖へ。

さわやかな朝の空気と小鳥たちのさえずり
可憐な野花や小動物との出会い、
湖面を渡る風。
［ネイチャーガイド＆遊覧船］は、
大沼に精通した経験豊富なガイドが
みなさまに“森の愉しみ”をご案内します。
その後は、島巡り遊覧船で
リフレッシュしていただきます。

NATURE GUIDE TOUR

【ネイチャーガイド＆遊覧船プラン】
出発時間／1日2回▶13:00▶15:00（10分前集合）
森の散策時間60分＋遊覧船30分
散策コース／大沼・小沼周辺をご案内します
料金／大人 3500円・小学生 2500円（幼児不可）
希望日／前日の16:00まで受付いたします
催行人数／2名～4名まで（1名様の場合はご相談ください）
ご予約と集合場所／大沼合同遊船株式会社（公園広場内）
☎0138-67-2229
ガイド／小泉真（CST,TP チーフカメラマン）

大沼合同遊船　株式会社
〒041-1354　北海道亀田郡七飯町大沼1023-1
TEL. 0138-67-2229　FAX.0138-67-3997　E-mail:yusen@onuma-park.com
http://www.onuma-park.com

こどもの時間。

特集

子どもだったころを、覚えていますか。
家の周りに、どんな草が生えていましたか。きょうだいと何をして遊びましたか。
好きな場所は丘のうえ？それとも水辺？
放課後にそこへ行けば、友達がいて寂しくない、そんな場所はありましたか。
なにか自分でもまずいと思うことをしたときに、しかってくれる大人がいましたか。
泣きそうな帰り道、言葉をかけてくれる大人はいましたか―。
転んでできるひざ小僧のかさぶたが、長いことできなくなっていた。
それに気がついて、「ああ、子どもの時代が終わったんだ」。そんなふうに感じたことがある。
「かさぶた」の日々はどんなだったか、慌ただしい暮らしの中で忘れてしまいがちだ。
函館や道南で、いまの子どもたちはどんな時間を過ごしているのだろう。
むかし子どもだった大人たちは、どんな時間を過ごしていたのだろう。
「子どもの時間」を通して、地域のありようを見つめ直してみたい。

子どもたちに自由な時間を

タチヤーナ・イリイナ／ロシア極東連邦総合大学函館校准教授

ロシア（当時は旧ソビエト連邦）に生まれたタチヤーナ・イリイナさんは、来日して20年以上になる。出身地のダリネゴルスクは、函館の姉妹都市である沿海州ウラジオストク市から車で7時間ほど離れた山あいの町だ。

幼少期は社会主義思想のもと、学校教育システムが十分に整備されていたため、塾や習いごとなどは必要なかったという。放課後はもっぱら外遊び。冬は氷点下20度にもなるダリネゴルスクだが、外でかくれんぼや鬼ごっこをして遊んでいた。

イリイナさんの記憶では、学校は午前8時半から正午か午後1時まで。学校の食堂で昼ご飯を食べたら家に帰る。学校にいる時間は短いが、宿題が必ずある。帰宅時に両親が不在の子どもが、学校に残って先生と宿題をしたり、他の子どもと遊んだりというシステムもあった。

3か月間の長期休みには、「ピオネールキャンプ」というプログラムに参加する。それももちろん無料だ。「資本主義経済が導入された今はお金を払わないといけないと思いますけれど、当時はそうでした。教育も医療も、全部国からお金が出ていた」。夏休み期間は宿題もあまり出ないため、キャンプ以外の期間は日本国内の親戚を訪ねるなど、リラックスして過ごしたという。

イリイナさんは、来日時9歳だった次男を函館で育てた。「彼が日本の小学校の宿題をやっているところを私はほとんど見たことがありません。いつもどこかですごく早く終わらせていた。家では私が彼にロシアの学校のプログラムを教えていましたから、彼はすごく忙しかったと思います」。中学生になってからは部活漬けで、また忙しい日々を送っていたという次男。ロシアの大学に入学し、日本にはない自由と楽しさを感じて、そのまま日本に住むことになったという。

「ロシア人の考えでは、人生は短い。だからできるだけ楽しく過ごさなくてはいけない。パーティーやいろいろなイベントをして楽しみます」。日本の夏休みは短く、宿題もある。子どもたちはリラックスできていないのではないかとイリイナさんは心配している。「日本はルールが多いです。少し緩めて、子ども達に自由な時間を与えたらいいと思います。子どもでいられる時代は短いのだから」

TATIANA ILINA ／旧ソビエト連邦ロシア共和国ダリネゴルスク市出身。極東国立総合大学（ウラジオストク市、極東連邦総合大学に改称）東洋学部日本語学科卒。英国リビング・ランゲージ・センター卒業。日本語通訳の資格を持ち、1998年に来日。現在は夫、長男とともにロシア極東連邦総合大学函館校で教鞭をとる。

「多様性」を体験する場こそ

フレッド・ガーソン／古道ホールディングス代表

来日して7年になるフレッド・ガーソンさんは、大学時代以外のほとんどをアメリカ・ニューヨークで過ごした。ガーソンさんが、他の国や他の人にはそれぞれの考え方があって当たり前と捉えられるように育ったのは、多様性に富んだニューヨークの環境によるものだという。「学校にもいろんな国の人がいました。私の人生とか、これからのキャリアにとって、すごくありがたい環境でしたね」

子どもの時間の使い方について、ガーソンさんはアメリカと日本の夏休みが大きく違うと語る。「日本で話すとうらやましがられるんですが、アメリカの夏休みは3か月あります。アメリカ全土、どこでもそう。その間、学校とは全く関係がなくなります」

長い夏休みの期間中はさまざまな団体が主催する7週間から2か月間ほどのキャンプに参加していた。子どもの個性や人格の成長を目的に、カヌーやスポーツなど多くの遊びを体験するプログラムだ。長期間そのような環境で過ごすから、新しい友達もできる。子どものころの夏の思い出といえば、このキャンプだそうだ。

「子どもには見るものすべてが『当たり前』とガーソンさんは言う。大人になるとさまざまな情報が入ってきて、他と比べて環境のよしあしを問うようになる。しかし、子どもにとってはそうではない。「例えば、ここは遊び場じゃないとか、ここは遊び場だとかの区別もない。どこでも遊び場にします」。あるものを受け入れ、そこに適応し、楽しもうとしていくのが子どもなのだ。

「それでもあえて子どもにとってどういう場が大事なのかという話をするなら、ちょっと大きな話になりますけど、多様性に触れる場だと思います」とガーソンさん。「多様性」とは国際的という意味ではなく、年齢、属性、考え方などが多様であることだ。様々な団体と関わっているガーソンさんだが、仕事の関係だと、同じような年齢、同じような仕事、同じような価値観の人が集まる。

「多様性に触れて、自分を成長させないと、ビジネスでは生き残っていけません。そこで野外劇に挑戦しました。ペリー役で出演して、昨年で6回目になりますが、私が参加した団体の中で野外劇は一番多様性がありましたね。あのような場に参加する人が増えればいいと思います」

なにかと「減る」「減少する」といった言葉が多く使われる函館の話題の中で、野外劇の観客動員数は5年連続増加している、とガーソンさん。多様性の魅力、なのだろうか。

Fred Gerson／アメリカ・ニューヨーク出身。ペンシルバニア州スワースモア大学卒。ニューヨークでアナリストとして勤務後、2012年、英会話講師として来日。15年、中島れんばいふれあいセンター2階のコワーキングスペースに経営コンサルタント会社「古道ホールディングス」を開き、代表取締役を務める。41歳。

思い切り、生き生き過ごせるよう

横山南海子／学童クラブ「ひのてん」スタッフ

よこやま・なみこ／兵庫県三木市出身。兵庫県警勤務、カナダでのワーキングホリデーを経て2016年に函館に移住。はこだて国際民俗芸術祭のスタッフと学童クラブ「ひのてん」のスタッフに。33歳。

「とにかく外に出て動き回ります。冬も、函館山に登ったり雪遊びをしたりと、子どもたちといると体力も使いますよ」と、笑顔で語る横山南海子さん。学童クラブ「ひのてん」（函館市末広町）のスタッフとして4年目を迎える。

学童の仕事は初めてながら、剣道3段、柔道初段の持ち前の体力で子どもたちと全力で向き合う。横山さんが函館へ来るきっかけは、姉が国際民間文化芸術交流協会（IOV）から派遣されて第1回はこだて国際民俗芸術祭に通訳として参加したこと。「面白いお祭りが函館である」と聞き、フィリピンへの短期留学やカナダでのワーキングホリデーを経験した横山さんの心が動いたのだ。

自身が子ども時代を過ごした兵庫県三木市は人口約8万人。小学校のころは川で遊んだり、林の中を探検に行ったりと、毎日のように外で遊んでいた。テレビゲームにはあまり関心がなく、自然の中で遊びを見つけることが楽しかったという。そんな子どもの頃の経験も、けん玉やお手玉など昔遊びを大切にしている学童の仕事に生きていると振り返る。

自分の子どものころと、今の子どもたちを比べると、「課業の増大や習い事など放課後の多忙化を感じます。遊びの誘い方も『今日、何する？』から『今日、遊べる？』と予約制になっているのが、自分の頃とは違います」という。昔は近所の人たちが見守っていてくれて、良くも悪くも思いがけず親の耳に届くことがあった。「最近は希薄になったと言われるご近所付き合いも、学童クラブでは大切にしています。悪さをした時は本気で叱ってくれる雷おじさん的な存在がいることが心強く思うんです。多忙化・多様化が進むなか、限られた時間の中で子どもたちがいかに遊びきったという充実感を得られるか、そのための時間・空間・仲間作りを大切にしたい」と横山さんは目を輝かす。

特集 こどもの時間。

子どもはいつもウェルカム

田中樹里／北海道国際交流センタースタッフ

田中樹里さんは、両親は日本人だがオーストラリアで生まれ育った。同国最大の都市シドニーの郊外で育ち、「子どものころは外で、みんなで、というのがとにかく楽しかった」と幼少期を振り返る。

小学校3年生くらいまで過ごした地域では、近所の大きな公園で遊んだのが楽しい記憶として残っているという。観光地化されていない、住民のためのローカルな公園だったが、オーストラリア国内でも珍しいほど大きな公園だった。「グラウンドやバスケットコート、バラ園なんかもあって、兄2人と自転車やスクーターに乗って遊んでいました。休日に家族で遊びに行くのもその公園。オーストラリアのほとんどの公園と同じように、バーベキューをするコーナーがあって、たっぷり遊んでお腹がすいたらバーベキューをして、また遊ぶ。いつも汗だくになっていました。函館にはそういう外遊びができる場所はあるのかな？　雪で隠れているからか、私はあまり思いつかないです」

特に外遊びが好きだったという田中さんは、転んだり迷子になったりという経験もある。しかしそんなときも、地域で見守り、育てるという態勢に助けられていた。「泣いていたり、けがをしたりすると、すぐに『大丈夫？　どうしたの？』と声をかけてくれる大人がいました。お巡りさんもすぐ来ます」

現地では「ストレンジャーデンジャー」という言葉があり、「知らない人には声をかけない、ついていかない」と教えられていた。だが、子どもが一人でいたり泣いていたりしたら、必ず誰かが声をかけた。「大人たちはいつも子どもに対してウェルカムという態度でいました。迷惑そうにされたことはないし、自由だったけれど、安全も守られていました」。安全は守りつつ、遊びの中での多少のけがは経験として済ませる親も多く、「公園で子どもがけがをした時、よく見る叱り方は『それは自分のせいでしょ』。日本では危なさそうなことをしているとけがをする前に止める。ちょっと過保護かなと思います」。

田中さんは「自分の子どものためにベストな環境を用意してあげたいと、自分から動く若い家族が増えたら、函館は子どもにとって楽しい街になると思う」と語る。「遊園地や子どものためのお祭りみたいなお金のかかったことをするより、毎週・毎日気軽に行ける場所があることが大事じゃないかな」

たなか・じゅり／オーストラリア・シドニーで生まれ、21歳までオーストラリアで育つ。4年前に来日後は東京で過ごし、2017年から母親の実家がある七飯町の大沼に在住し、一般財団法人北海道国際交流センターのスタッフに。25歳。

迷惑をかけあって仲良くなれる

馬麗／中国語通訳

まー・りー／中国山東省生まれ。2007年から函館在住。この春で小学校4年生と1年生になる子を育てるワーキングマザー。39歳。

「みんな男の子が欲しい時代だった。近くに住んでいる同世代の子どもで、女の子は私を含めて4人しかいませんでした。だから外で木登りしたり、メンコ勝負をしたり、男の子っぽい遊びが多かったですね」

一人っ子政策中の中国山東省で生まれた馬麗さん。実家は街と農村の境にある。子どものころは特に母親が忙しく、両親と出掛けたという記憶はあまりない。

「中国は共働きが普通だから、いつも友達と遊んでいた。小学校1年生から自転車で遊びに行ったし、やりたいことは全部やった。あの頃は一日が長く感じていました」

中国では宿題も多いが、学校での自習の時間も多い。馬麗さんの通っていた学校では、朝7時くらいから自習が始まった。冬は自習前に教室を暖める当番があり、午前6時には起きる生活だった。「そのころは目覚まし時計もなくて、私はよく寝坊してしまうので、同じ教室の女の子が起こしに来てくれていたんです。一度、夜中の2時に来たことがありました。朝の当番になった時、その子も緊張していたんでしょうね。月で明るかったのもあって、時間を勘違いしてしまって。当然、学校の門は開いてないので、外遊びで鍛えた木登りのスキルを生かして、よじ登って入りました」

函館では2人の子どもを育てながら仕事もしている。長男は小学1年生の間は早い時間に帰ってくるため、仕事との調整が大変だった。子どもの人数が多い地区では学童も定員いっぱい。習い事は高額な月謝がかかる。「遊びに行かせるにも、学校で決まっているんですよ。『電車に乗るなら3人以上』とか『この公園は行っちゃだめ』とか。私は子ども本人が行けるのであれば、行けばいいと思うんですけどね」

子どもはそもそも誰かを頼るもの、他人同士は迷惑をかけあって初めて仲良くなれる、と馬麗さん。「日本も、昔みたいに子どもを預けあうような関係があってもいい。函館から変わりましょう。『誰かがやる』と決めるのでは苦しくなってしまう。できる人ができることをやりましょう。色んな考え方や選択肢があっていい。子どもだけではなく、皆が楽しく平和に暮らせるようなまちづくり。それが『国際都市函館』です」

特集 こどもの時間。

支えあいながら子育て

趙 喜蓮／北海道国際交流センタースタッフ

「行政はもちろん、企業も町の人も、函館を思う声をもっと上げればいいのに」。夫の転勤に伴って日本各地で暮らし、子育てをしてきた趙さんはそう語る。

人が集まるところでは交流が生まれ、コミュニティーが出来上がる。「鳥取では、一度県を離れた人がいろんな知見を持って帰って来ます。そんな人たちが集まると、自然と地域を盛り上げる方法の話題になる。そういう場に子連れのお母さんたちもいて、一緒にアイデアを出したりするんです」

そのような中で、趙さん自身もやれることを見つけ、実行してきた。「カフェを経営している友人の提案で、不定期に韓国料理教室を開いていました。息子を連れてくとみんなが可愛がってくれるから、私も続けられた。誰かに預けなくては、というプレッシャーがなかったのが、ありがたかったですね」

和歌山に転勤すると、生活が一気に慌ただしくなった。「転居してから仕事が始まるまでの2か月で息子を預ける保育園を決めなくてはいけない。市役所は最低限の情報はくれるが、基本的には自分で頑張ってくださいねという感じ。保育園の評判など全くわからず、1日で7軒くらい見てまわって決めました」

次男が生まれて仕事も辞めたころ、地域とつながる方法を探していて出会ったのがNPO法人ホッピングだった。「社会とつながりたいお母さんを支援する団体」で、スキルや資格を持つ母親が講師を務めるイベントを開いたりしている。キャリアカウンセラーの資格を持つ趙さんも「講師」の一人となり、生後半年の次男を連れて子育て支援の拠点施設に通い、ボランティアでお母さんたちの再就職などに関する相談を受けた。「次男を相談に来るお母さんたちやスタッフが世話をしてくれた。私も他の子どもを見る。助け合って子育てしていましたね」

いつでも地域の中に飛び込み、時には自らコミュニティーをつくり上げてきた趙さん。函館に移った当初は「大阪の家族や友達とも離れ、寂しさがありました」というが、「息子たちにもすぐ友人ができ、イキイキと幼稚園で過ごしている姿を見て励まされた」という。慣れない土地だが、「とにかく人が好きで人に出会いたい」という思いと行動から、函館でも友人のネットワークができ、支えられながら子育てできているという。

長男はこの春、小学校に入り、次男は幼稚園の年中になる。函館でも母親たちが互いに助け合い、社会とつながることのできる「集まる場」ができないかと、思いをめぐらせている。

ちょう・ひりょん／大阪生まれの在日韓国人3世。高校生まで朝鮮学校に通った後、留学して4年間アメリカで過ごす。帰国後に結婚し、転勤族の夫とともに大分、鳥取、和歌山で暮らし、2017年4月から函館在住。北海道国際交流センターで働く傍ら、息子2人を育てる。

地域で育てる。北海道東川町「もものがの家」の目指すもの

上川地方の中心都市・旭川市の隣に位置する人口約8,000人の東川町。大雪連峰の美しい景観を生かして「写真の町」を掲げ、「写真甲子園」を仕掛けたり、日本で初めて町営の日本語学校を始めたりと、さまざまな取り組みを続けて人口を伸ばしている町だ。「持続可能なまちづくりと人づくり」を旗印に、子どもの教育や国際交流にも力を入れ、未来を担う子どもたちの成長を地域全体で支えている。

移住を希望する子育て世代を受け入れる態勢や設備の充実、多様な人と交流できる場づくり、そして移住者それぞれのライフスタイルを尊重する取り組みも、町が中心となって進めている。この町には「誰もが暮らしやすい社会」を築くために重要な施設がいくつかある。その一つが「幼児センターももんがの家」だ。

ここには幼稚園と保育所、そして子育て支援センターが一つに集約されている。町の子ども未来課も配置され、子育て相談や親子体験教室が行われて、「ももんがの家」の幼稚園・保育所に入園していない親子も利用できるスペースが用意されている。子どもと保護者、保育士や幼稚園教諭、そして子育て行政に関わる職員までが一つ屋根の下に集い、「地域全体で子どもを育てる」仕組みづくりのモデルになる環境だ。

「子育てに関するさまざまな機能を集めることで、子ども・保護者・行政の距離を近づけることを狙ったんです」と、企画総務課長の菊地伸さんは言う。隣接する町立東川小学校は、さらに地域住民とのつながりをも深めることを狙った工夫がなされている。放課後に子どもが遊ぶ学童保育センターや、コンサートも開かれる交流プラザ、公園施設を備え、敷地内には体験農園があって子どもが米・野菜作りを体験できる。収穫された食材は学校給食で使い、地域の食材を大切にする郷土愛も育んでいるのだ。学校の図書室や体育館は町民なら誰でも利用することができ、地域と住民をつなぐ重要な場となっている。

「ももんがの家」も東川小学校も、松岡市郎町長を中心に社会の変化に柔軟に対応し、住民一体となって地域をつくり上げようとする東川町の姿勢を象徴する施設だ。他地域でも生かせる、学ぶべき点がたくさんあるのではないだろうか。

上／「ももんがの家」の外観。
左／米作が盛んな東川町。冷涼な気候で高原野菜や花などの農産品も生産している。

ゆるやかに見守る目を

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる代表理事

知識や技術を学ぶ場に

勉強をする。ゲームをする。昼寝する。もちろん、何もしなくたっていい。一般社団法人「函館圏フリースクールすまいる」に通う不登校の子どもたちは、来たいときに来て帰りたい時に帰る。築年数の進んだ民家の居間には、和やかな時間が流れていた。

「すまいる」は2012年春、函館市地域交流まちづくりセンター（末広町）の一角でスタート。その後、引っ越して、17年からは富岡町の民家を拠点にしている。不登校や引きこもりの小中高校生、若者を週4日、午前10時から午後3時まで受け入れている。

「通うのは、エネルギーが切れる前に、学校へ行かない選択をした子どもたち。ここで知識や技術を学ぶ機会をつくりたい」。代表理事の庄司証さんはそう語る。希望者には、マンツーマンで学習支援を行っており、その内容は買い物、運動、翻訳、釣り、サイトに投稿する動画作成など多岐にわたる。「どんなことをやりたいのか伝えることで、プレゼン力が付く。今後もし学校でトラブルがあっても、相手に伝えられるようになるはず」。さまざまなことへの挑戦を通して、自分に何が向いているか気付くきっかけにもなるという。

目の前にいる子を見る

昔の子どもたちの遊び場といえば外だった。「今、すまいるに来ている子を見ても、すぐに外に飛び出す感じはありません。でも、子どもの持つ好奇心は変わっていない。ネットの世界が広がり、自分の興味や関心を探しやすくなった。良い悪いではないんです」。例えば昔の子は外で遊ぶ分、走ることなど全身の使い方はうまかった。今の子はダンスや細やかな動きが上手。「もちろん、個人差はありますが、思考回路や感じ方が昔の子と今の子では違うな、と子どもたちを見ていて思いますね」

庄司さんが地域の問題としてあげるのは「貧困」だ。函館の生活保護の受給率の高さにも表れている。目に見えにくい問題だが、社会問題として認識されるようになり、各地で「こども食堂」を設けるなど地域コミュニティーの対策が広がった。ただ、庄司さんは警鐘を鳴らす。昔は「あの子、ご飯を食べてないね？」と地域で心配するような柔軟性があったが、今は「子どもを見るよりも問題に目が行ってしまう」と感じるからだ。

しょうじ・あかし／七飯町生まれ。北海道教育大学院修了。在学中から、不登校の子どもが通う「チーフーキリスト教学園」の活動に参加。2012年4月、「函館圏フリースクールすまいる」を開設。すまいるは函館市富岡町2-19-5。TEL070-4156-3195

「抽象的で理想論かもしれませんが、目の前にいるその子を見るまなざしが大切。トータルで見ていくバランスですね。すぐに、相談窓口や児童委員にいくことは大事なことですが、変化に気づくには、身近なおじさんおばさんが『元気だね』と見守る環境があればこそ」

学校統合の影響も

少子化による学校の統廃合の影響も顕著だ。函館では五稜、大川、桐花の3中学校が統合し、2016年度に五稜郭中が開校したが、不登校の問い合わせは、規模の大きい学校からがどうしても多くなる。

今までは学校との関係がスムーズにいって通えていた子も、統合によって状態が変わり、通えなくなることがある。学校が大きくなればなるほど、子ども1人に対する支えが行き届かなくなる。函館は人口が減っているが、不登校の割合は増えている。統合で効率化を進めるだけでなく、子どもたちにとって良い学習環境になっているかを考えなくては、と庄司さんは言う。札幌では市が民間のフリースクールの活動を支援しており、函館でも多様性のある「子どもたちをゆるやかに見守る目」が必要だという。

「すまいるに通う子どもたちの顔が、いい顔になっていくのを見るのがすごく好きなんです。不登校の子には、函館が好きで地元を離れない子が多い。すまいるで学校とは違う過ごし方をした子たちが、函館の外から来る人と関わることで、函館をどう変えていくのか楽しみですね」

特集 こどもの時間。

子どもたちの環境は変わっている

本田真大／北海道教育大学函館校国際地域学科准教授

本田真大さんは2010年に着任以来、子どもや家族、教師、支援者の心理を研究し、いじめ、虐待、不登校など、学校教育や子育ての現場のさまざまな問題を解決するための支援を実践してきた。その本田さんの目には、函館の子どもたちの現状はどんなふうに映るのだろうか。

「函館に限りませんが、日本では子どもが犯罪に巻き込まれることも少なくない。知らない人は危険だから、話しかけないというのが今の日本の常識です。ですが、たとえばオーストラリアでは、道に迷っていたり、泣いている子がいたら、交番だったり、専門家につなぐという地域もあるそうです」

困っている人を見つけたら専門家に「つなぐ」という役割は、現在の日本では自殺予防のための「ゲートキーパー」という形で研修が行われているそうだ。

「昔は地域コミュニティーがしっかりしていたので、地域の中にそのような存在が自然といた。でも今は地域の状況も変わり、適切なつなぎ方ができる人を育てるための研修プログラムが必要なんです」

コミュニケーション能力の変化

本田さんによれば、函館は育児支援を希望する／提供する市民が登録して、サービスを利用／提供する会員制の有料子育て支援組織「函館市ファミリー・サポート・センター」や、研修を受けたボランティアが家庭訪問し家事や育児を一緒に行う「ホームスタートみはら」、市内に複数あり気軽に利用できる「子育てサロン」など、地域全体で子育てを支える仕組みが充実しているという。

そんな函館を含め、現在の日本社会で子どもを取り巻く環境はどうなっているのか。

「今と昔の子どもたちで大きく違う点が二つあります。一つはスマートフォンなどの情報機器が欠かせないものになって、親世代も子育ての中で日常的に使い、0歳からスマートフォンに触れる子どもが増えています。もう一つは、社会環境の変化による子どものコミュニケーション能力の変化です。以前は多くの兄弟姉妹の中で育ち、放課後の時間も多かったので地域の広場で遊んだりして、異なる年齢の子どものコミュニケーションがあった。ですが徐々にその機会が減り、それを補うために1990年代くらいから、学校教育の道徳や総合学習で、対人関係や集団行動を営むための技術であるソーシャルスキルを学ぶ授業が取り入れられるようになりました」

ほんだ・まさひろ／新潟県上越市出身。筑波大学大学院一貫制博士課程人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻発達臨床心理学分野修了。中学校から大学までソフトテニス部に所属。小学校時代は段ボールを使って戦国武将の格好をしていたという。37歳。

保育園・幼稚園・こども園の大切さ

乳幼児とその家族にも関わっている本田さんが、強く感じる点があるという。「函館の保育園・幼稚園・こども園はそれぞれが、さまざまな取り組みをして頑張っている。ただ預かっているのではなく、子どもたちのいろいろな力を育てている。園長のリーダーシップの下、ベテランが若手を育ててゆく連携の仕方がすごい」

3世代が同居していたかつての時代から比べれば、核家族化が進み共働きも増えた今、保育園等の役割はますます重要になっている。「小学校入学前の子どもたちが大きな集団で遊べるのは、もはや保育園等しかないのです。家庭だけでは十分経験できない『はぐくみ』がある保育園・幼稚園・こども園の価値と大切さを、地域で生活する私たちがもっと知ることが大切です」

自身は大学3年のとき、不登校の小中学生を支援する活動に参加した。しかし、不登校の子たちにうまく接することができず、ショックを受けて、子どもの心理を研究する道に進もうと考えたのだという。そして大学院では幼児から高校生の子どもと保護者のカウンセリングを学び、実践してきた。「いろいろなことがあっての人生。自分の人生にも、子育てにも遅すぎるということはない。気づいた時から少しずつ変えていくことができるんです」

特集 こどもの時間。

すべての子どもが健やかに

佐藤ひろみ／函館市子ども未来部長

函館市の統計によると、2014年の市内の出生者数は1611人だったが、17年には1410人と約200人減っている。市は子育て支援を強化して定住者を増やそうと懸命だ。子育て世代の女性が抱える悩みの相談に保健師・助産師が対応する「マザーズ・サポート・ステーション」には17年で1756件の相談があり、増加傾向という。学童保育の利用者は15年に49ヵ所1782人だったのが18年には58ヵ所2265人と、こちらも増加している。

「子どもの数は減ってきているのに学童保育の利用者が増えていることから、共働き家庭等が増えていることが推察され、子どもたちの放課後の過ごし方が変化してきていると感じられます」と、市子ども未来部の佐藤ひろみさんは言う。市は子どもの生活実態を把握し、貧困対策等の施策の基礎資料にしようと17年、「子どもの生活実態調査」を行った。

この調査では5歳と小5、中2、高2の保護者と、小5、中2、高2の子どもに対してアンケートを行った。有効回答数は4306。その結果からは、いくつか特徴的な傾向がみられる。一つが家族構成などと家庭の年収の関係だ。両親のいる世帯では年収500万円以上が48・6％を占めるが、母子家庭では6・0％にとどまり、年収200万円未満が49・5％と約半数を占める。年収が下がると、進路希望を「高校まで」と回答した子どもの割合が高くなる。

平日の放課後の過ごし方を子どもに聞いたところ、「自分の家」が39・7％、「学校（部活など）」が27・6％。小5では、週1～2日過ごす場所は「同じ学校の友達の家」や「公園」が多い。塾に週1回以上通う小5は45・5％、中2では35・3％、高2は13・7％と、年齢が上がるほど減る。年収1000万円以上の家庭の子どもは78・8％が塾や習いごとに行っており、世帯収入によって学ぶ環境は違う。

子どもに「一番ほっとできる場所」を聞いたところ、「自分の家」と答えた割合が高いが、「ない」も4・3％ある。母親の就労状況では、夜8時～10時の夜勤がある家庭が全体の14・3％と1割を超す。子どもが平日に夕食をともにする相手は「親」が89・9％と大勢を占めるが、「一人で食べる」も9・8％いる。

佐藤さんによると、市では、ひとり親家庭への児童扶養手当の支給や、経済的な理由で就学が困難な小中学生への就学援助、入学準備給付金の支給や学童保育の保育料の軽減、給付型奨学金の支給などを行ってきた。また、保健福祉部が16年から中学生への学習支援をしてきたが、18年からは子ども未来部がひとり親家庭の小学生への学習支援を始めて、中学生への支援と連携するようになった。

保育に関しては希望の保育園に入れない「潜在待機児童」がおり、背景には慢性的な保育士不足もある。このため市では、保育士の資格を持っているが保育の仕事に就いていない人を対象に、最新の保育に関する講義や実地研修をする事業を行い、19年度からは保育士の負担軽減へ、清掃や給食の配膳などの周辺業務に従事する保育支援者を雇用する保育所等への補助事業を始める。

市は07年、当時の福祉部内に「子ども未来室」を設置し、12年に「子ども未来部」を設けた。現在200人以上の職員とともに業務にあたっている佐藤さんは「すべての子どもが健やかに成長できるよう、妊娠、出産、乳幼児期から青少年まで、切れ目のない支援を行い、子どもを守り育てる環境の整備や子育て支援サービスの提供に努めていきたい」と語る。

さとう・ひろみ／函館市出身。函館市総務部人事課、教育委員会学校教育部学務課、教育委員会生涯学習部次長、保健福祉部次長を経て、2018年4月より現職。

特集 こどもの時間。

【函館市子どもの生活実態調査】

調査対象／小5、中2、高2の子どもと保護者および5歳児の保護者。

調査方法／無記名によるアンケート方式。
5歳、高2は郵送による配布・回収。
小5、中2は教育委員会（各学校）を通じて配布・回収。

実施時期／2017年8月上旬から9月中旬。

※下の表は調査内容のうち、小5、中2の子どもの回答を一部掲載。

塾や習い事に行っているか。

	行っている	行っていない	無回答
小学5年生	67.9%	31.3%	0.8%
中学2年生	58.1%	41.3%	0.6%

平日に「1人でいる」頻度は。

	まったくない	あまりない	ときどきある	よくある	無回答
小学5年生	41.9%	26.2%	18.1%	11.3%	2.6%
中学2年生	30.9%	23.7%	22.4%	16.4%	6.7%

一番ほっとできる場所はどこ。

	自分の家	学校、部活など	ない	その他
小学5年生	80.5%	1.0%	3.7%	14.8%
中学2年生	81.8%	4.8%	4.3%	9.1%

函館で「SDGs」を広めよう！ 「誰一人取り残さない」社会を～ leave no one behind ～

最近、雑誌や新聞、テレビでよく取り上げられている“SDGs”(エスディージーズ)という言葉を知っていますか？カラフルなアイコンを見た事はありませんか？

SDGs(Sustainable Development Goals持続可能な開発目標)とは、2015年9月の国連サミットで採択され、国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成される“世界をもっとよくするための目標”のことで、地球上の誰一人として取り残さないことを宣言しています。17のゴールは、途上国だけでなく先進国も含めた全ての国が取り組むべき目標であり、先進国である日本で暮らす私たちも当然大きな役割を担う必要があります。大きすぎる目標に感じるかもしれませんが、一人一人の小さな行動や気づきが世界を変えることにつながっています。では、私たちにできることはいったい何か。

2019年、HIFは国際交流に併せてSDGsを意識しながら活動し、多くの人々がSDGsの概念を理解でき、自分事として捉えることができる学びの場を作りたいと考えています。

まずは、自分ができる事・興味があることからHIFと一緒にはじめてみませんか？

※HIFでは、市内各所でのSDGsに関するイベント・セミナーを開催予定。詳細は決まり次第、HIFのホームページ・Facebookでご案内いたします。Think globally! Act Locally!

HIF 語学ボランティア募集

あなたの語学力を生かして、函館の観光振興に貢献してみませんか？登録制なので、ご自分の都合に合わせて活動ができます。事前研修でボランティアに必要な観光知識やビジネスマナーを学べるので、どなたでも安心して始めることができます。興味のある方は、お気軽にお問い合わせください！

内容

・クルーズ客船寄港時の観光案内
・外国人観光客へのアンケート調査など

対象

・高校生以上(※高校生は保護者の許可が必要)
・外国語(英語、中国語、韓国語など)レベル日常会話以上の方
・明るく元気に活動できる方
・公共交通機関や自家用車などで活動場所まで行ける方

HOKKAIDO INTERNATIONAL FOUNDATION
(一財)北海道国際交流センター(HIF)
040-0054 函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail: info@hif.or.jp
http://www.hif.or.jp

私たちの場所だもん

長谷山裕一

小学校の隣にある公園を熱心に掃除する少女に男が声をかけた。

「ここは学校ではないのに、どうしてこの公園を掃除しているの？」。赤い体育帽の少女は「だってここ、私たちの場所だもん」と答えたという。声をかけた主は弘前大学教授の北原啓司氏。その公園は青森市内の「つくだウェザーパーク」だ。

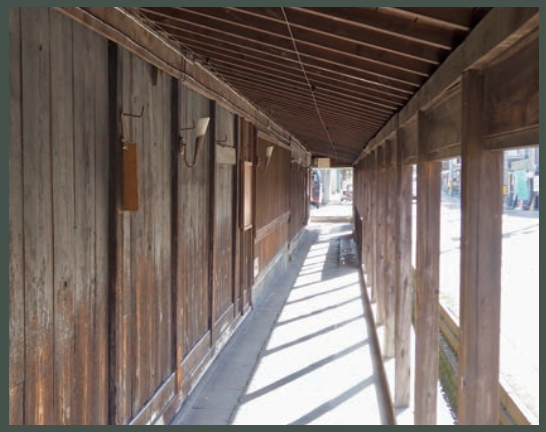
この公園は北原氏が1998年からコーディネート役として、数多くのワークショップを繰り返して市民とともに計画された施設で、完成後数年経ってから視察に訪れたときの出来事だった。氏は、教師からの指示で少女は掃除しているだろうと予想していたが、異なる答えに面をくらったと言う。むろん、少女が言う「私たちの」には、その場所を所有しているという意味は含まれていない。あるのは「私たちの大切な場所」というニュアンスである。

私有地はパーソナルな空間で他者が容易に侵すことができない。一方で、道路や公園などはパブリックな空間なので、誰もが自由に使うことができるが、その維持管理は所有する行政が行うものだと多くの大人が認識している。しかし、その少女は、所有権や管轄を超えた「私たちの大切な場所」という概念が先行して、行動に移していただけなのである。

パーソナルとパブリックの中間にセミパブリックと呼ばれる領域がある。家の前の花壇やベランダに花を植えたり、道路を掃いたりすることも、セミパブリックでの自主的な行為といえる。中間領域は境界も管轄もあいまいであるが、まちの「ゆとり」になっている。それは心のゆとりにも通じる。

人の心を所有できないように、まち全体を所有することはできない。しかし、愛しい人や自分の家を大事にしたいと想うように、まちを大切にしたいとの想いが広がると、その想いが共感して、私たちの大切な場所に変わるのかもしれない。そんな想いを粗末にしないために何ができるのか今日も考えるのである。

黒石市のこみせ通り。私有の軒先がセミパブリック空間となっている。



PROFILE

函館市生まれ。建設会社を退職後、地方公共団体に入庁。まちづくりや市民活動支援、交通政策などに従事。

インカラ／彼方を見る

中川大介／人と水研究会

PROFILE
岩手県生まれ。新聞記者。カヌーや渓流での釣り好きが高じて人の暮らしと水とのかかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

明治末期の北海道・樺太を舞台にした人気の漫画「ゴールデンカムイ」（野田サトル、集英社、週刊ヤングジャンプに連載）に登場する、「インカラマッ」という北海道アイヌの若い女占い師に心引かれている。

細面に、笑みを絶やさぬかのような切れ長の目。豊満な体を民族衣装（刺しゅうだけで模様をつける木綿衣「チヂリ」だろうか）で包み、隠された金塊の秘密を知る父親を探すヒロインの北海道アイヌの少女「アシリパ」に協力するかに見えて、金塊を追う日本陸軍第7師団と通じてもいる。敵味方不明の妖女である。

アイヌ語で「インカラ（見る）・マッ（女）」。「見る」を意味するアイヌ語には「ヌカラ」もあるが、ヌカラは他動詞で「～を見る」と目的語が要る。これに対してインカラは自動詞。この作品でアイヌ語を監修する千葉大学のアイヌ語学者、中川裕が編んだ「アイヌ語千歳方言辞典」（草風館、1995年）によれば、ヌカラは見る対象がはっきりしているが、インカラは「空」とか「外」とか、「単にある方向に視線を向けることだけを表す」のだという。

放浪の美女インカラマッが占いをして見るのは、「未来の時間」だ。時の彼方へと視線を向け、見えてきたものを語る彼女の言葉が、宗谷海峡を越えて樺太にまで赴くアシリパたちの旅にからんでゆくのである。

アイヌの人々がインカラして見たものは何だったろう。原始の色濃い森か川か、獲物となる動物の群れか、はたまた敵か。わき上がる雨雲か吹き来る雪雲か、それがもたらす自らの運命か。インカラとは、北海道や樺太、千島列島で北方の自然をつぶさに見て、自然と折りあいながら生きてきたアイヌ民族の暮らしに深く根ざした言葉であるのだろう。

「交易の民」

アイヌの人々が「アイヌモシリ（人間の大地）」と呼ぶ北海道の地で、時の彼方へ目をこらす。そこに見えるのは、アイヌ、そして樺太から南下してきたオホーツク人、蝦夷（エミシ）と呼ばれた東北地方の辺境の人々、さらに中央から北上する和人とが交わり、影響しあいながら織りなしてきた歴史である。

続縄文時代の4～5世紀、古代アイヌは北海道から東北北部に進出したが、古墳時代の古代日本人に押し上げられて道南・道央へ戻り、東北北部を訪れて交易をするようになる。7世紀以降は、東北北部から道央へ移住した蝦夷と交わりつつ擦文文化を形成し、道東北へ足場を拡げていたオホーツク人を排除しながら東へ、北へと展開する。

やがて13世紀以降のアイヌ文化期にかけて、交易の資源を求めて海を越え、より北へと進出していくのである。

こうした「動的なアイヌ史」を語る瀬川拓郎（札幌大学、元旭川市立博物館長）の著書によれば、彼らは縄文以来の狩猟採取の伝統を受け継ぎつつ、ダイナミックに外の世界とつながり、他民族と交わりながら文化を形成してきた「交易の民」であった。

和人との重要な交易品となったサケの漁獲量を拡大し、クロテンの毛皮やオオワシの尾羽を求めて、アイヌは樺太、千島列島へと進出する。樺太ではニブフなど北方先住民や大陸の元朝と一時は敵対しつつ、やがて極東アムール地方との交易を通じて、函館市北方民族資料館にも飾られている「蝦夷錦（えぞにしき）」と呼ばれる豪華な中国製の官服などを蝦夷地にもたらすのである。

「アイヌモシリで自然と共生してきた人々」といったイメージではとらえきれない、じつに躍動的な動きをアイヌはしてきたのだと瀬川は説く。

道南十二館

交易の増大にともなって和人からさまざまな「宝」がもたらされ、それはアイヌ社会の階層化や内部対立を生んだ、とも瀬川は指摘するが、そのダイナミックな動きは和人の蝦夷地進出によって封じこめられてしまう。

津軽海峡を見渡す函館市東部の段丘上にある史跡「志苔館（しのりだて）跡」は、室町時代の14世紀の建造とされる和人の城館跡である。土塁のあいだから遠望する函館山の山すそにも、志苔館とともに「道南十二館」と称された「宇須岸館（うすけしだて）」があった。

これら12の館のうち、志苔館、宇須岸館を含め10の館が北海道アイヌの蜂起によって陥落した。15世紀半ばに勃発した「コシャマインの戦い」である。志濃里（しのり）の鍛冶工房で、小刀（マキリ）の品質と値を巡

函館市の「志苔館跡」から函館山を望む。山すその元町公園近くには「宇須岸館跡」がある

り、発注主のアイヌの少年が和人の職人と諍いになって刺殺された事件が発端であった。

この戦いは、松前藩の始祖となった武田（蠣崎）信広がコシャマイン親子を謀殺して鎮圧するが、その後も道南では１００年余りアイヌ民族の蜂起が続き、宇須岸館も志苔館も最終的に陥落する。やがて戦乱を制した蠣崎氏が松前を拠点とする統治体制を完成させ、中央政権の承認を受けてアイヌとの交易を一手に握るのである。

17世紀の「シャクシャインの戦い」、18世紀の「クナシリ・メナシの戦い」を経て、蝦夷地の和人支配は強固となる。その下でのアイヌ民族の窮状は、幕末の探検家、松浦武四郎も克明に記している。松前城下に往来して取引相手を選ぶ権利を奪われ、特定の場所に押し込められて取引レートの切り下げを飲まされ、「物資の生産者・交易の当事者」から、和人が経営する漁場や森林の労働者へと追いやられるのである。

「ゴールデンカムイ」はあえて描いていないようだが、近世以降のアイヌの人々が抑圧と差別の中で苦しみ、誇りを奪われたことは、紛れもない事実である。

「途上」にありて

この２月、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律案」（いわゆるアイヌ新法案）が国会に上程された。

アイヌ民族を「日本列島北部、とりわけ北海道の先住民族」と明記し、伝統サケ漁などで特例措置をみとめ、民族文化の振興に向けた自治体の計画に国が交付金を出す、といった内容だ。「従来の福祉、文化施策から地域振興を含む総合施策へと踏み出す根拠法」（北海道新聞２月16日朝刊）だが、「アイヌ民族から要望の強かった生活向上施策は明記しなかった」（同）とも指摘されている。

国際的な先住民の権利保障の流れに照らして極めて不十分な内容、と異論がある。新法は新たな一歩であるにしても、抑圧と差別に苦しんだアイヌの人々の歴史を振り返れば、新法制定の「先」をも見すえなくてはならないだろう。

異文化の混ざり合いの中で複雑に変容してきたこの列島の過去と、アイヌの人々とともに生きる社会の未来。双方を「インカラ」する力が要るように思う。今を生きる私たちも、異なる文化と出会い、影響しあって文化を形作る「途上」にある。世界各地で先住民族への抑圧と差別が生んだ問題の根深さを知る現代に生きるからこそ、謙虚に互いを尊重しあう姿勢を持ち続けたい。

瀬川は著書でこう書いている。

「連帯を欠いた差異に意味はない。アイヌという差異と連帯し、共に生きることができなければ、私たち一人一人が孤立し、剥きだしの差異になる未来を回避することなど、とうていできないにちがいない。アイヌの歴史を知り、アイヌと私たちの関係のなりたちを知ることは、私たち自身の未来をかえる、ひとつのステップにほかならないはずだ」

「アイヌの歴史　海と宝のノマド」（講談社選書メチエ）

北海道・北東北の縄文遺跡の世界遺産登録に耳目が集まるが、縄文から連なるアイヌの人々のことにも目を向けたい。美女インカラマッのように、はるか彼方を見る力を持って。

【参考文献】「アイヌの歴史　海と宝のノマド」（講談社現代選書メチエ、２００７年）／「アイヌの世界」（講談社現代選書メチエ、２０１１年）／「アイヌ学入門」（講談社現代新書、２０１５年）／「アイヌと縄文」（ちくま新書、２０１６年）＝著者はすべて瀬川拓郎

昔の子ども、今どきの子ども

第十三話

かぎっ子

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる・代表

これまで小中学校へのスマホ等の持ち込み禁止だったことを文科省が見直していく、というニュースを先月見た。大阪府では、すでに持ち込みを認めていく方向らしい。賛否はあるだろうが、これからは首から「キッズケータイ」をぶら下げる子が増えるのかもしれない、とぼんやり考えているうちに、自分が子どもの頃に、首から鍵をぶら下げている子がいたことを思い出した。

いわゆる「かぎっ子」という子どもたちで、元々両親が共働きだったり、特に母親が働き始めたりすることで、学校が終わっても家に親がいない時間を過ごすことになる。もちろん、昔から自営業などで自宅に１人で過ごす子もいただろうが、１９６０年代からそういう子どもたちが都市部の団地などの集合住宅を中心に急増し、登校時や遊ぶ時に家の鍵をぶらさげていたことから「かぎっ子」という呼び名が定着したらしい。

そんな子の家に遊びに行くと、たくさんの漫画やゲームがあって、お菓子も好きなだけ食べることができた。子どもだけの家。自分だけしかいない時間。好き勝手できて、そのときはうらやましいと思ったけれど、たまの、一人でのお留守番は、家の中に何も音がなく、ラップがかかった冷たいご飯は味がわからなくて、心細くて淋しいものだったことを覚えている。

「なんでもし放題だよ」とその子は笑いながら言っていたけど、本当に心の底から楽しめるものなのか、自分は子どもながらに感じるものがあった。精神的社会的自立の機会にもなりうるという指摘もあったが、そういえば、その子はどこか大人びていた。

そんな「かぎっ子」が社会問題化していくと、親がいないことで不安定になったり、遊びや食生活はもちろん、事故などの様々な危険性もあったりしたことで、児童保育の必要性から学童保育などが全国的に定着し、「かぎっ子」は減少していくことになる。確かに、フリースクールに来ている子どもたちに聞いてみたが、みんな「かぎっ子」の言葉も意味も知らなかった。

「かぎっ子」は、経済成長や社会の変化の過渡期で生まれてきた現象の一つだったのだろうと思う。今は、家の鍵もスマホで開けられる時代である。親が日中仕事で家にいないことの方が多くなってはいるが、居場所も増えたし、再び問題化するような「かぎっ子」が生まれることはないだろう。自分も人の親になって、共働きでもあるけれど、あの子がもしかしたら感じていたかもしれない淋しい想いをする環境は作りたくない、と思っている。

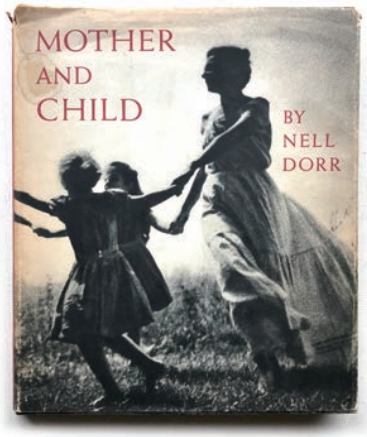
PROFILE
七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフーキリスト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすまいる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。

WU-BOOK

●ウー・ブックスの書棚から。

夏井俊介／ウーブックス店主

アメリカの写真家ネル・ドアが1954年に刊行した２作目の写真集。ネル・ドアは1930年代のニューヨークで、主に鉄道とポートレイトの専門カメラマンとして活動を開始。当時ニューヨークで著名な写真家たちとの交流、自身のカメラスタジオを持つなど順風満帆に思えたニューヨーク生活だったが、一変、愛娘の死という堪え難い現実が彼女を待ち受けていた。失意の中ネル・ドアは娘や孫たちと共にニューハンプシャーのニューイングランドの田舎へ移住し、ある家族との出逢いをきっかけに再び写真を撮り始める。被写体となった家族は、日本でもお馴染みのターシャ・テューダー一家。亡くなった娘と同年代で若き母でもあったターシャと彼女の子どもたちを通じ、母と子の関係、ありふれた家族の日常をまぎれもない神秘として描写した感動的で愛に満ちた１冊。



PROFILE

群馬県生まれ函館市育ち。夏井珈琲勤務の傍ら、古書販売や本に関わるさまざまなイベントを企画する WU-BOOK を運営。古今東西の素敵な本を発掘して紹介している。

シネマで
コーヒーブレイク

「こども食堂にて」（２０１８年）

米田哲平／函館港イルミナシオン映画祭実行委員長

監督・脚本／佐野翔音
プロデューサー／森川一重
出演／本下はの、北原佐知子、平田友子、
高橋万里子、大地伸永

今、児童虐待・ネグレクトなどによる事件は後を絶ちません。子どもを取り巻く状況は、年々厳しさを増しているようにも感じます。

映画は、親から虐待を受けた経験がある主人公の二十歳の女性が「子ども食堂」にボランティアとして参加するところから始まります。里親の元で暮らす子どもの苦悩を描き、社会的養護の在り方も考える内容です。

子どもをテーマとしてこれから公開される新作としては、子どもの目線から現代社会の貧困問題を描いた「こどもしょくどう」があります。監督は「火垂るの墓」の日向寺太郎氏、脚本は「百円の恋」「嘘八百」等で当映画祭のゲストとしても参加していただいている足立紳さん。この作品もお薦めしたい。

今年最大の話題作となった是枝裕和監督による「万引き家族」は祖母の年金を頼りに、足りないものを万引きで賄っている一家が、ひとりの少女を迎え入れることによって変化していくさまが描かれています。また、母の失踪後一人で弟妹達の面倒をみる長男の姿を通して、家族や社会のあり方を問いかける「誰も知らない」。そして、子どもの取り違えという出来事に遭遇した２組の家族を通して、愛や絆、家族といったテーマを描いた「そして父になる」などは、今一度観ておきたいところです。

PROFILE

滝川市出身。函館における数多くの文化事業や施設・イベントの企画運営に携わる。

食旅脳内メモリーズ

國立大喜／バザールバザール 店主

毎日の食卓で食べるごはんもたまらなく好きだが、旅先のシチュエーションでいただくごはんは、新鮮な風景や空気感、心のワクワクと共に味わうことで深い思い出となって五感すべてに刻み込まれる。旅という状況が調味料やスパイスとなり、食事が身体や記憶に染み入る。だからそのことを振り返った時、ふわっと幸せな体験として五感を刺激する。記憶の鮮明さは年と共に失われて行くが、食事をした時のその幸福感は逆に曖昧さを増す記憶のキャンパスに浮き上がってくるかのようだ。2014年僕はネパールのポカラの街から静かに美しく佇むヒマラヤの山々を眺めていた。アンナプルナ。サンスクリット語で「豊穣の女神」という名の連峰。アンナプルナI峰は8000mを超える。登山素人の自分でも登れるコースはないかと聞いてみるとアンナプルナサウスのベースキャンプまでのルートなら一週間程で周れるとのこと。たまたまだがその時、女神ラクシュミールを祀るティハールというお祭りの時期で街中は踊りや蝋燭の灯や色粉で描かれた曼荼羅で美しく彩られて祝福モード。お正月のような雰囲気の中、ネパール人のガイドの男の子と二人登山旅が始まった。急激な登り道から始まる最初の数日間は重いリュックと共にただただ着いて行くのがやっとで、来たことを若干後悔しつつも、あと少しあと少しと自らを励まし進んだ。やっとの思いでその日の工程をクリアし、宿に併設の食事スペースにゆっくり座り、その日の成果である高さから眺める、息を呑むような澄んだ美しさの眺め。その眺めと共にいただくカレーやチャイの美味しさといったら。言葉では表せない程の幸福な時間。心地よい疲労感・達成感・空腹感。高地の澄んだ空気と目を開けたままで瞑想してるかのような気持ちにすらなる清らかな眺め。温かく煮込まれた食材に広がるスパイスの香り。その全てのシチュエーションに溶けて行く五感の幸福感。あの幸福体験をまたしたくいつかまたネパールへ渡りたい、山の中でカレーを出すようなお店ができたらいいな、そんな夢を描きたくなるようなあの山と山の街での旅の思い出。

（左）ティハールというお祭りには、玄関先を飾る。（右）トレッキングの宿で食べたネパールカレー。

Illustration by Tomoka Kunitate

PROFILE

函館に生まれ、地元の高校を卒業後は岩手県の大学へ進学したのち、札幌のシンガポール料理店に就職。27歳のときにトルコへ渡航し現地の料理店で学ぶ。現在は函館市末広町でトルコ料理店を経営。

ジャズマンの赤レンガ倉庫

西野鷹志／文・写真

１９９０年代初め、ニューヨーク。メトロポリタン歌劇場でのオペラに居眠りしてしまい、気分をかえようと夜更けにタクシーを走らせ、ジャズクラブのスイート・ベイジルでマッコイ・タイナーのピアノに酔いしれた。これぞ、本場のジャズ、と。大都会の夜は、モーツアルトやらバラードやらが、ごちゃ混ぜになったり玉子のごとくでまさに興奮のニューヨークであった。この時の思い入れからジャズに親しむことになった。

函館は金森赤レンガ倉庫でのプレイで、印象にのこった二人のジャズマンがいる。

ボストンのバークリー音楽院を首席卒業の後、ニューヨークでたまたま立ち寄ったジャズクラブで、セッションに疲れたピアニストの代役として手をあげ、一夜にして鮮烈なるプレイでデビューを果たした大西順子。その後、二度の活動停止も乗りこえ、みごとに復活する。そのきっかけは、小澤征爾の猛烈な誘いに負けて出演した２０１３年、「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」。小澤指揮のオーケストラとのその夜かぎりの共演であった。ガーシュイン「ラプソディー・イン・ブルー」。満場の拍手、いつまでも鳴りやまず。

彼女が１９９４年春、ジャズの聖地ニューヨークでくりひろげたライブ盤「ビレッジ・バンガードの大西順子」は、僕がいつも聴いている好きなＣＤだ。１９９６年秋に金森倉庫で演った大西は、力強いタッチ、なによりも疾走感あふれるピアノに虜になってしまった。

その前年の１９９５年秋。金森倉庫でカメラをかまえた途端、トリオのリハーサルは、たったの１、２分で終わってしまった。本番はカメラＯＫかと問うたところ、ノー・プロブレムとロン・カーターのありがたい一声。

ロン・カーター　1995

大西順子　1996

その日の出だしは、おなじみのナンバー「ソー・ホワット」。貫禄充分のベースの巨人が、スーツにネクタイのきちっとした佇まいでテーマを演奏し、バロンのピアノがつづき、一気にニューヨークの裏街界隈にひきこまれてしまった。

この二人以外に魅せられたのが、爺さまかと思ったが若々しく透明感に満ちた音を奏でたピアノのジュニア・マンス。さらにベースのエディ・ゴメス。エディがビル・エヴァンス・トリオに加わった際の「いつか王子様が」を聴きながらこの原稿を書いている。まことに心地よい。

PROFILE

西野鷹志（にしの・たかし）　東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で「ライカは行く」を17年間連載、2012年・147回で終えた。すきなもの―フランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、ライカM6。

「お客様と信頼の絆で結ばれて117年」

株式会社 高木組

本　社／函館市東雲町19番13号　0138-22-1195(代)
札幌支店／札幌市中央区大通西14丁目1番地13　北日本南大通ビル2階　011-206-4516(代)

http://www.takagigumi.jp

HAKODATE MARUKATSU SUISAN

函館ベイエリアへ行こう

旅の楽しみといえばその土地の名所巡り、その土地ならではのお食事やショッピングを楽しむ事。
函館ベイエリアには心に残るお食事やお買い物を楽しめるスポットがたくさんあります。

櫻咲く、春爛漫の地上の星。特別史跡五稜郭

ペリー来航によって動き出した日本の新時代。開港場となった函館に徳川幕府が築いた我が国最初の西洋式城郭・五稜郭は、幕府の最後の輝きを象徴するとともに、サムライたちの希望の星でもありました。以来、百五十余年、今も静かに函館の四季の中で輝き続けています。北の大地に刻まれた巨大な星、五稜郭と函館の歴史の移り変わりを展望台で実感してみませんか。

新緑の五稜郭

錦秋の五稜郭

雪化粧の五稜郭

五稜郭歴史ガイドツアー毎日実施中

展望料金に200円追加で、エレベータースタッフが、展望台にて五稜郭や箱館戦争についてご案内する約30分の歴史ガイドツアーです。毎日９時～17時（冬季は10時～16時）の毎時00分に実施中です。　☆詳しくはお問合せください☆

※１回20名様まで。（当日以外のご予約も可能です）

最新情報は、
五稜郭タワー公式サイトから。
www.goryokaku-tower.co.jp

五稜郭タワー
函館市五稜郭町43-9　TEL 0138-51-4785

季刊 @h［アット・エイチ］
SPRING　2019

●発行人
池田　誠（HIF）

●編集人
中村ひでのり

●編集スタッフ
齊藤美悠
趙　喜蓮
笹木明日香

●デザイン
中村事務所

●撮影
saeru
田中樹里

●イラストレーション
小宮伸二（表紙）
國立朋佳（本文）
H.Nakamura（本文）

●サポーター会員（敬称略）
稲泉省／鈴木詔次／前岡一郎
松本百合／川上　納／田中眞一
山下淳一

●連載＆編集協力（敬称略）
中川大介
長谷山裕一
堺　麻那

●連載（敬称略）
西野鷹志
庄司　証
米田哲平
夏井俊介
國立大喜

次号は
2019年６月30日発行です。

2019年春号（年４回発行）
2019年3月31日発行
（一財）北海道国際交流センター（HIF）
［@h（アット・エイチ）］編集事務局
040-0054　函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770　FAX. 0138-22-0660
E-mail　volut@hif.or.jp　　http://www.hif.or.jp/volut/

禁・無断転載

［@h］設置場所

【全店配布】ラッキーピエロ/ハセガワストア/郵便局（一部）/生活協同組合コープさっぽろ/みちのく銀行/ 道南うみ街 信用金庫 / 美容室アイズ

【本町・五稜郭付近エリア】函館市芸術ホール/函館市中央図書館/総合保健センター/北海道新聞社(道新文化センター)/函館YWCA/レストランバスク/ワーカーズコープ茜/シネマアイリス/函館市青年センター/北海道教育大学函館校/Colz/Bees.Bee/函館短期大学付設調理製菓専門学校/クラブカットＥ'/おおわき整形外科/喫茶Canvas/ 夏井珈琲ブリュッケ / ちいさなしあわせパン /G スクエア/ Relotta cafe/ 函館圏フリースクールすまいる / 中島れんばいふれあいセンター

【函館駅前付近エリア】函館市役所/工房虹と夢/Pizzeria AMORINO/NHK/千歳図書室/サンリフレ函館/函館駅前バス案内・待合所/函館市総合福祉センター/百間 /VILLAGE

【美原・本通・中道・桔梗付近エリア】亀田支所/渡島総合振興局/Cafe en/ ROYAL SKOOL /水花月茶寮/ドゥ・アンジュ/花の湯/ 桔梗配本所(桔梗母と子の家)/ LADIGUE/ 珈琲物語 /Pizza and BIANCHI /お総菜大地/チッチョパスティッチョ/公立はこだて未来大学/文教堂桔梗店/三省堂/タイヤ館函館本通店 / 亀田公民館 /わっとな/ ファイヤーピット/ おしま地域療育センター/ 函館蔦屋書店 FUSU / スプリングボードユニティ21

【西部地区エリア】北海道国際交流センター(HIF)/Pain屋/ふるる函館/MOSSTREES/金森赤レンガ倉庫/FMいるか/バル・レストラン・ラ・コンチャ/甘味茶房花かんろ/Old Miss 菊/ギャラリー村岡/金子眼鏡店/カフェやまじょう/ロシア極東連邦総合大学函館校/Cafeteria Morie/函館市女性センター/はこだて工芸舎/函館市公民館/函館市地域交流まちづくりセンター/ROMANTiCO ROMANTiCA /Select Coffee Shop Peacepiece/ 和雑貨いろは/カフェ三日月 / 箱館元町 珈琲店 / バザール・バザール/Cafe Classic /Cafe & Deli MARUSEN /カフェ D'ici / SMALL TOWN HOSTEL Hakodate/tombolo

【五稜郭駅・昭和エリア】Beauty Concierge AOKI/こじまキッズクリニック/港図書室/タマツ電機/北海道大学水産学部/函館市亀田青少年会館/Seak

【山の手・湯の川・旭岡付近エリア】旭岡図書室/銭亀沢支所/函館市民会館/湯川支所/湯川図書室/函館大学/函館短期大学/函館工業高等専門学校 /花園温泉 /カット&クリニックたかすぎ

【北斗市エリア】北斗市役所/かなで～る/LEAVES/しんわの湯/北斗市スポーツセンター/北斗市公民館/久根別住民センター く～みん/七重浜住民センター れいんぼー/Coing

【七飯・大沼エリア】こなひき小屋/ななえ天然温泉ゆうひの館/七飯町文化センター/ 大中山コモン/レストランピノ/宮崎鯉屋 /南北海道大沼婦人会館/カントリーキッチンWALD/大沼国際交流プラザ/ネイバル森 / foufou /Studio Lumier / 七飯町役場 /大沼国際セミナーハウス / おおば製パン

いろんなこと、募集しています!

●［@h］はおおぜいの方々のボランティアによって支えられています。安定した運営のため、広告の掲載、または協賛してくださる方（サポーター会員）を募集しております。年会費は一口、団体／￥10000、個人／￥3000です。みなさんのご理解とご協力、よろしくお願いします。なお、広告の掲載料につきましては事務局までお問合せください。

●編集部では読者のみなさまからのご意見・ご感想、さまざまな情報をお待ちしております。お気軽にお寄せください。ご協力よろしくお願いします。

［@h 編集事務局］
TEL. 0138-22-0770　FAX. 0138-22-0660
E-mail　volut@hif.or.jp　http://www.hif.or.jp/volut/